

あいさつ

本日はご参加いただきありがとうございます。

主催者として撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部から少し、あいさつさせていただきます。

本日は、明治公園で「さよなら原発大集会」と大規模なデモが行われています。その関係で、この集会も若干いつもより人数が少ないかと考えていたのですが、椅子が足りなくなるのではないかと心配するほどこんなにおおぜいの方に参加いただきありがとうございます。

今回の証言集会には山下正男さんをメインゲストとしてお迎えしました。熱海から来ていただきました。

山下さんは、戦時中兵隊として中国に渡り、戦後、戦争が終わったあとも山西省に残留させられて、その後4年間にわたって八路軍と戦闘を交えたのです。激しい戦闘で500人も戦死しているのです。その大半は4年後の八路軍との最後の攻防戦での戦死です。戦争が終わって4年も経って戦死しているのです。この人たちの死はどのように意味づけられるのでしょうか。最後に捕虜となって永年収容所、西陵農場、太原戦犯管理所などを体験した人たちの「山西残留問題」という、この事実は日本社会で余り知られていないのではないのでしょうか。

軍の命令で残されたにもかかわらず、いつの間にか軍籍を外されて「本人希望の残留」とされ、結局は「棄民」とされたのです。小泉政権以来言われているように「自己責任」とされたのです。したがって、軍人恩給などは当然もらえず、戦死者が靖国神社に奉られるか否かが大きな問題となった、とも言われています。

詳しくはご本人、山下さんから詳しくお話しがありますので、ここでは山下さんのお話をより理解を深めていただくために、用意した資料の説明、紹介をしておきます。

1つ目、山下さんのレジメです。2枚もので、1枚はご覧のようにレジメです。2枚以降は山下さんの自費出版の手記「わが青春に悔いあり—終戦後中国残留事件—」という冊子について紹介されているインターネットから転記したものです。最初は山下さんの略歴です。

2枚の下からは、手記の一部で「山西残留事件」の首謀者たち」という項目部分です。

もうひとつ、1枚もの裏表のコピーです。これは、本集会のチラシの写真にもありましたが、岩波で長く編集に携わっていた米濱泰英さんが書かれた「日本軍山西残留」という本の一部です。この本は山下さんの体験を丹念に聞き取

り、詳しく調べて、それをもとに山西残留問題の全貌を明らかにしたもので、まだ日が浅い 2008 年に発刊されたものです。

私も横浜の有隣堂で見つけて、一通り読んでみました。その中の一部をコピーしたものです。

山下さんの資料にも名前が出てきますが、「山西残留事件」の首謀者の一人で、黒幕的存在の城野宏が、山西省をどのように利用しようとしていたのか、がたいへんわかりやすい、と思いましたが資料として準備しました。

今日はもう一人、山西省に残留させられた体験者の稲葉さんに埼玉から来ていただいています。稲葉さんと山下さんは今日はお会いしたそうです。稲葉さんにはおつきの方がご一緒です。

昨年、この市民フェアで坂倉さんに証言していただいたときにサポートしていただいた高柳先生です。次に開催する神奈川証言集会では稲葉さんにじっくりとお話を聞かせていただきたい、と考えています。

いま名前を言いました坂倉さんですが、昨年の今、同じ神奈川証言集会でたいへんお元気にここで証言していただきました。昨年も参加していただいた方には記憶に新しいことだと思います。残念です。昨年暮れに亡くなりました。

「また横浜に来てもらいますよ」とお願いしていたし、ご本人も「いいですよ」とニコニコしながら仰っていましたのに、本当に残念です。

坂倉さんは、亡くられる前に、それまでこつこつと書き留められた手記を出版されました。その本の完成を見届けて亡くられたのです。

「若者たちが編んだ“日本軍兵士”安井清」という本です。後ろで販売しています。安井という名前は坂倉さんの旧姓です。

これまで、私たち撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部はここ 5～6 年の間に 20 回近くの証言集会を開催して、併せて、のべ 3000 人くらいの人たちの証言を聞いていただいています。おもに撫順戦犯管理所を体験された中国帰還者連絡会（通称：中帰連）の方々から、それぞれの戦争体験、シベリア体験、戦犯管理所体験について、直接にお話を聞いてまいりました。

何よりも、直接自分の耳で聞いてもらい、それぞれの証言者が身体で表現されるのを、皆さんに肌で感じてもらいたい、ということにこだわってきました。

しかし、その皆さん 90 才を越え、超高令となりました。当事者たちからお話を聞かせてもらうにはよいよ限界に達したと自覚せざるをえません。

神奈川支部にとって、お宝ともいえるべき絵鳩毅さんは、間もなく一週間後の

16日に100才の誕生日を迎えられます。今は、奥様ともども藤沢市内の老人ホームで静かにお暮らしです。まだまだたいへんお元気でおられます。

たいへんお元気ではありますが、今日のような集會に横浜までお出でいただいて長い話をさせていただくにはいささか躊躇せざるを得ません。近々、神奈川支部としてささやかに100才のお祝いをしたいと考えています。そして直接お尋ねすれば、まだまだどんなことでもお話ししていただきます。お申し出いただければご一緒に、直接お話しを聞く期待をつくることは可能です。

つい先日も、今はその若者は中国へ留学していますが、その直前に絵鳩さんの話を聞きたい、と申し出がありましていっしょに伺いました。

絵鳩さんもたいへん喜ばれて、その若者に自分の体験を交えて「中国での留学中に、とにかくたくさんさんの友達をつくりなさい、人とひとが心を通じあえば今のような日中関係には絶対にならないんだよ」、と強調されておられました。

その若者も、「自分の目標が定まりました」と喜んでいました。

こういうことはこれからもあるでしょうが、証言集會というような場面に絵鳩さんに御足労をおかけすることは困難と思います。

中帰連の方たちから直接お話しが聞けなくなって、これからは、戦犯管理所を直接体験されていなくても、当事者の周辺の関係者の方からお話を聞くことも真実に近づくひとつの道ではないかということで検討はしています。

例えば、戦犯管理所が開設されたのが、戦後4年を経たからのことですが、すでに戦争中に八路軍は「3大規律、8項注意」の理念に基づいて日本兵捕虜に接していた事実についても私たちは知らなければならないと思います。この八路軍と共に行動してこられた人もおられます。まだ、お話を聞くことができるのではないかと思います。

しかしそれだけではまだまだ不十分だと思っています。

私たち、受け継ぐ会としては証言集會の継続こそが命だと考えています。そのためにはどのようなことをテーマとして設定すべきか、について検討しているところです。何とか道を切り開きたいと考えています。ぜひ、皆さんからのご意見を聞かせていただきたくてこれまでとは多少込み入った内容のアンケートを作成しました。ぜひご協力をお願いします。

少し話しが変わりますが、昨年11月末から12月初めにかけて川崎の京浜共同劇団で「人のあかし」という芝居が開催されました。午前中、ここでそのダイジェスト版のDVDを上映させていただきました。

「撫順戦犯管理所で何があったのか」と言うことを伝え、残すことが受け継ぐ会の私たちにとって核心的な目的であります。この芝居は、見事にそのこと

を見事に、しかも900人もの観劇者の皆さんに伝えてくれました。

出演者の熱のこもった演技によって、見るものすべてを「感動」「感激」「感謝」の世界に導いてくれました。

今日は、そのときの見事な脚本を書かれた和田さん、主役で土屋憲兵のモデル役で主役を演じられた五柔さんも参加して下さいました。ありがとうございます。

そんなことで、話しが長くなってはいけませんのでそろそろ終わりますが、私たちが考えなくてはならないことです。歴史の真実ということはひとつしかないはずだと思います。その歴史の真実はないがしろにされて、常にゆがめられ、ひん曲げられて、結果今日の状況があるのだと思います。

ただ私たち自身が知らなさすぎることにひとつの原因があるのではないだろうか、と今日の参加者の皆さんに対して言うべきことではないと思いますが、私はそう思います。

私たち自身が知らなければならないことはまだまだあるのだと思います。これからも歴史の真実に向かって着実に歩を進めていきたい、ということが私たち神奈川支部の考えであります。

本日は最後までぜひご協力をお願いします。これから山下さんのお話しに移らせていただきます。よろしくをお願いします。